

熱い甲子園が終わると街に秋の気配が漂います。東北の健児お疲れ様でした。

次の山場はナデシコジャパンのオリンピック予選。その間に余震があったり、国会のニュースに腹を立てたり、暇なお年寄りにはテレビから離れることが出来なくて、血圧を上げたり下げたりで、なかなか仙境に遊ぶ環境にはほど遠い今日この頃ですが、笑ったり怒ったり出来る元気があるうちはまだ大丈夫。心配なのは自然の脅威だけです。

幹事会がありましたので報告を。



————— 8月18日の幹事会 —————

出席 加藤支部長、大久保、川口両副支部長、千葉、清和、嶋原、大矢、佐藤（友）、柿沼、菊池各幹事、涌井監事、星相談役、美馬五郎氏、以上13名。

議題

① 義捐金の使途など

- ・義捐金は414名、458,000円。
- ・23年度と24年度支部会費（計4000円）を全額免除とする。✖
- ・本人と近い親戚に人的被害があった場合見舞金1万円を支給する。物的被害は非対象。
- ・一部を23年度総会の雑費（横断幕、アトラクション、遠隔地交通費等）にあてる。
- ・義捐金の残は別会計とする。

✖今年度会費を既に納入された方にはお返しします。

② 23年度総会（兼予告） *詳細は9月末頃10月支部便りに掲載します*

- ・日時：平成23年10月10日（体育の日）総会12時 懇親会午後1時～
- ・会場：「パレスへいあん」昨年と同じ。
- ・会費：3000円。今回義捐金を若干使わせてもらいます。
- ・みつわ会沖会長を懇親会に招待する。

出欠の回答ハガキを同封しましたので、9月26日必着で返送して下さい。

参加費の負担が少ないこの機会、是非多数の出席を。

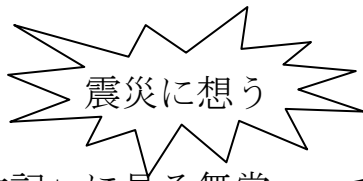
③ 次期役員は総会までに決定します。

④ 23年度新入会員：佐藤賢一、美馬五郎、瀬川邦宏、越智俊英さんの4名。ようこそ。

⑤ その他：ツーバイフォー（壁式）建築は地震査定の対象になる箇所が多いので、損害割合が大きくなる場合があります。査定員がウツカリ軸組み工法と間違えて「一部損」で認定したところ、正しくは「全損」だったというケースがありました。再確認すべし。

————— 9月の行事 —————

	支部	みちのく損保
9月 9日	臨時に幹事会があるかもしれ ません。その場合は各幹事に別途 連絡入れます。	ゴルフ
14日		料理教室
24日		「楽天」応援ツアー



「方丈記」に見る無常 千葉繁明

展覧会場で、春の陽ざしの中に小舟が漂うのどかな風景が描かれた一枚の水彩画に足を止めた。2011年3月11日貞山堀で描かれた風景画である。仙台東部の海岸沿いにある貞山堀(ていざんぼり)は、その昔藩祖伊達正宗公が、石巻、仙台を結ぶ用水として築いた運河で、とても美しく静かなところである。

春の日差しに誘われてこの運河を訪れた作者が、のどかな風景をスケッチしたその日の午後2時46分に、三陸沖を震源とするマグニチュード(M)9.0の巨大地震が大津波を引き起こし、海沿いにある全ての集落を襲い、この美しい風景も瓦礫と共にのみこまれてしまったのである。

美しい風景画は人間の心の無常の世界を描くものといわれるが、九死に一生、助かったその作者にとって、生涯忘れることのできない風景画となってしまったのである。

一瞬のうちに多くの尊い命を奪い、家々を押し流し瓦礫の山の爪痕を残した津波の惨状は余りにも無常である。戦後の復興を成し遂げたのはまだ一世紀にも満たないというのに、これほどの惨状を突きつけられた我々はどうしたらよいのだろうか。歴史の中でも、戦乱、天変地異、疫病、飢餓、火事など人々が苦しみ無常の世界にさまようことのなんと多いことだろう。

一千年前の我が国に大津波が襲った当時の現実を描写し記録に残している文学がある。

「元暦二年の比、大ないふる事侍き。そのさまよのつねならず。山くずれて河をうずみ、海かたぶきて陸をひたせり。」

1212年今から約1000年前の鎌倉初期に鴨長明によって書かれた随筆「方丈記」である。

「行く川の流れば絶ずして、しかももとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、且つ消え且つ結びて、久しくとどまる事なし。世の中にある人とすみか、またかくの如し。」逝く者は還らず。「方丈記」は当代一流の歌人でもあり、琵琶の名手でもあった長明が、「無常」をいやというほど思い知らされた果てに洛南日野に一丈四方(3.3メートル四方)の方一丈の草庵を建て閑居独処の自由を謳歌しながら書き綴った「方丈」の「記」である。出家遁世したのは元久元年(1204)五十のとしである。23才で世を捨てた西行や兼好に比べると遅すぎるくらい出家であるが最後に我慢しきれなくなって人生の葛藤と世の無常から逃避したのである。しかし、特筆すべきは平安末期から鎌倉初期の、驕れる平家の都落ちから、鎌倉武家の台頭までを方丈の中から見届け「方丈記」という文学に残し、今回の大地震を現実のものとした、我々に歴史を思い起こさせてくれるよすがとなったのである。

「深き谷のほとり閑なる林の間に、僅なる方丈の草の庵を結べり。傍らに琴琵琶をたて置けり。今更の身にはおふせぬ手すさびながらも、昔忘れぬ名残に、折節はかきなでゝ思いをやる。しばしば松の響きに秋風の楽をたぐへ、独り詠じて、みづから心を養うばかりなり。方丈のすまい楽しきことかくの如し。」

世のはかなさや放射能の汚染もない静かなところで余生を送りたいと思うこの頃である。震災の日に見上げた星空の美しさは今でも忘れることができない。